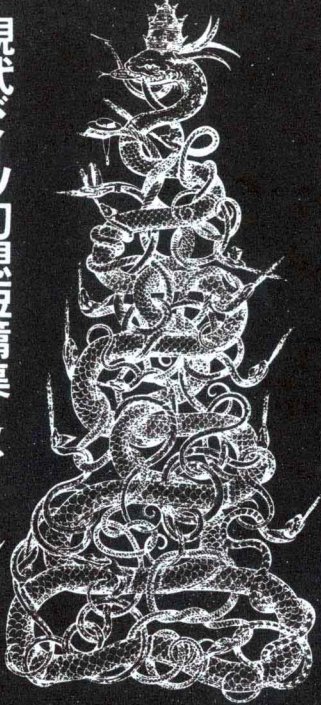


Deutsche phantastische Erzählungen der Gegenwart: Gustav Meyrink u.a.



紀田順一郎 荒俣宏 責任編集

世界幻想文学大系 ⑬



現代ドイツ幻想短篇集 Gマイリンク 他 前川道介 編訳
Deutsche phantastische Erzählungen der Gegenwart: Gustav Meyrink u.a.

国書刊行会

現代ドイツ幻想短篇集

昭和五〇年九月一日印刷 昭和五〇年九月一五月初版第一刷発行

著者——グスタフ・マイリンク他

編者——前川道介 訳者——麻井倫具・深見茂・波田節夫・石川実・前川道介・鈴木潔

発行者——佐藤今朝夫 発行所——株式会社国書刊行会

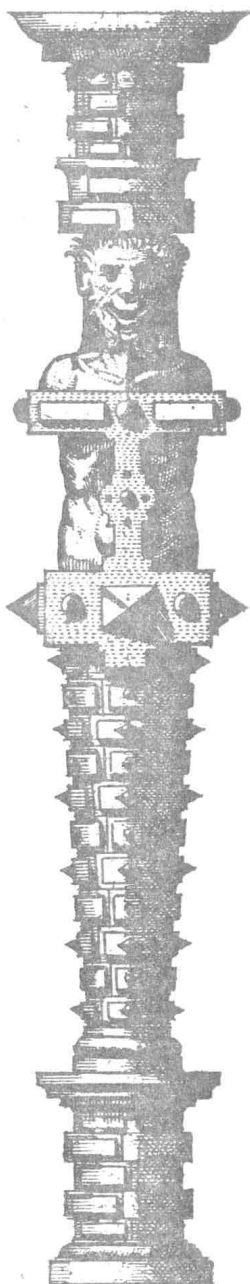
東京都豊島区巣鴨三—五—一八 郵便番号一七〇 電話〇三—九一七—八二八七 振替東京六五二〇九

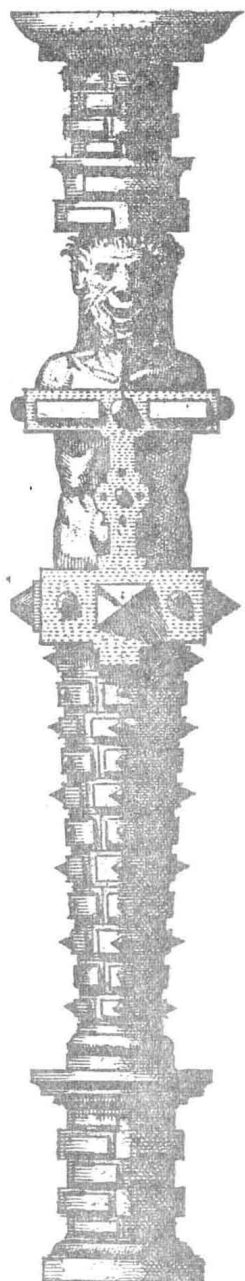
造本——杉浦康平・鈴木一誌

印刷——セイユウ写真印刷株式会社・凸版印刷株式会社 製本——凸版印刷株式会社

定価——二、二〇〇円

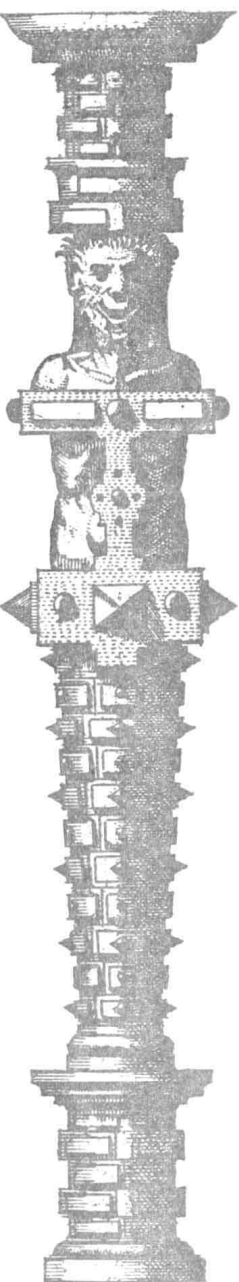
●——落丁本・乱丁本はおとりかえします







現代ドイツ幻想短篇集
グスタフ・マイリンク他——前川道介編・訳





目次

12 ——— 現代ドイツ幻想短篇集

グスタフ・マイリンク 麻井倫具H訳

12 ——— 灼熱の兵士

20 ——— 壇の上の男

38 ——— 石油綺譚

50 ——— ひそかに鼓動する都会ブラックの魅力①

56 ——— 神秘の都ブラックの魅力②

ハンス・ハインツ・エーヴェルス 石川実〓訳

64 C・3・3

82 カデイスのカーニヴァル

90 スターニスラワ・ダスプの遺言

カール・ハンス・シュトロープル 前川道介〓訳

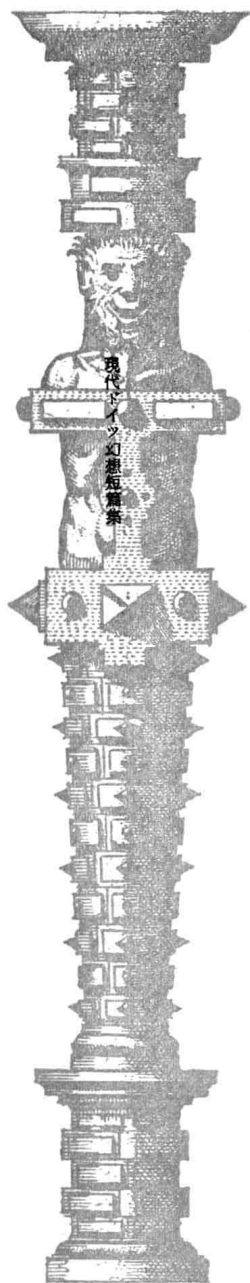
134 ファン・セラノの手記

ヴィルヘルム・フォン・シヨルツ

170 噂 前川道介〓訳

186 窓の顔 鈴木潔〓訳

現代ドイツ幻想短篇集





ヤーコプ・ヴァッサーマン 石川実〓訳

200 ——— ヴィンチガウのペスト

アルブレヒト・シェッファー 石川実〓訳

214 ——— ハーシエルと幽霊

アレクサンダー・M・フライ 波田節夫〓訳

220 ——— 人殺し

クラウス・マン 波田節夫〓訳

236 ——— 楽しい一日

クリスタ・ライニヒ 前川道介〓訳

244 — エリダノス号

アルフレート・アンデルシュ 波田節夫〓訳

248 — ヴェニスの或る暖爐取付け工の身の毛もよだつ体験

ヴェルナー・ベルゲングリューン 深見茂〓訳

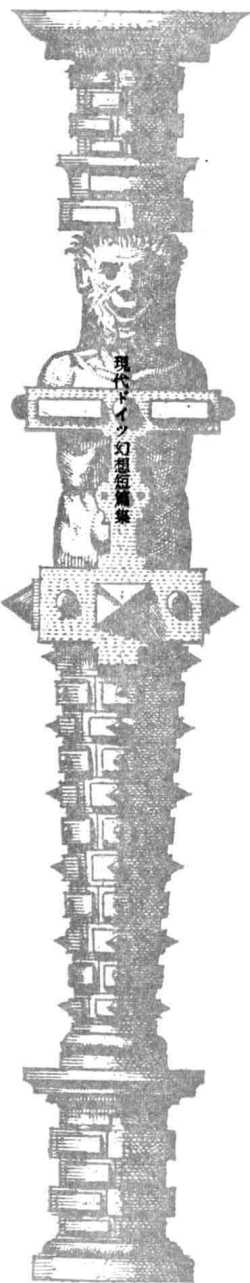
262 — シュペルトの旅籠^{はたし}

284 — 踊る足

312 — 冥合^{めいごう}の術

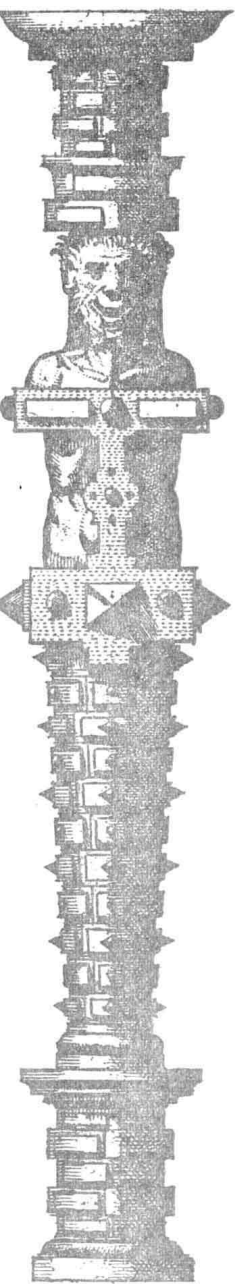
336 — ドイツ的恐怖と幻想の文学 — 前川道介

現代ドイツ幻想短編集



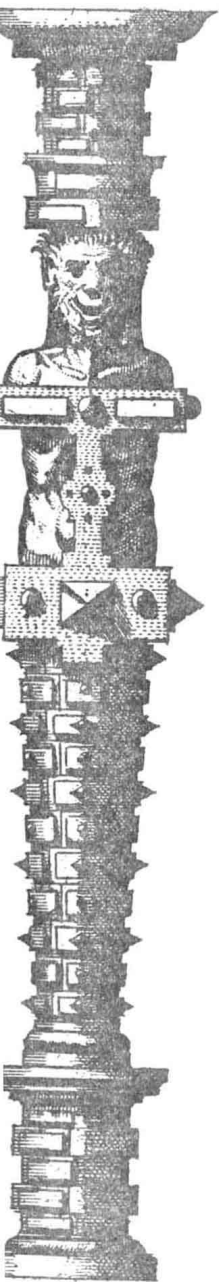


現代ドイツ幻想短篇集





グスタフ・マイリンク——麻井倫具Ⅱ訳





灼熱の兵士

外人部隊の負傷兵の全員に包帯を巻いてやるのは、軍医たちにとって容易な仕事ではなかった。安南兵どもは粗悪な銃をもち、鉄砲玉は、ほとんど例外なく、哀れな兵士たちの身体の中にもぐり込んだままだったのである。

医学は、近年、たいそうな進歩を遂げた。それは、読み書きのできない兵隊たちでさえも知っていた。彼らは、他に残されたすべもなかったからなおさらのこと、どんな手術にでもすすんで身をゆだねたのである。

大半の者は命を落した。だが、それはきまって手術を受けた後のことで、そんな結果になっても、死亡の原因はとなると、もっぱら、安南軍の弾丸があきらかに発射前に無菌状態で扱われなかったせいか、もしくは、空中を飛んでいるあいだに、健康に害のあるバクテリアを引っさらって来たから、というのであった。

学問的なものもろの動機から、政府の認可をえて、この外人部隊に従軍なさっておられたモストシェーデル*1教授の報告書は、この原因に疑問の余地をゆるさなかった。同教授のエネルギーな指示があったおかげで、どうやら、兵士も村の原住民も、あ

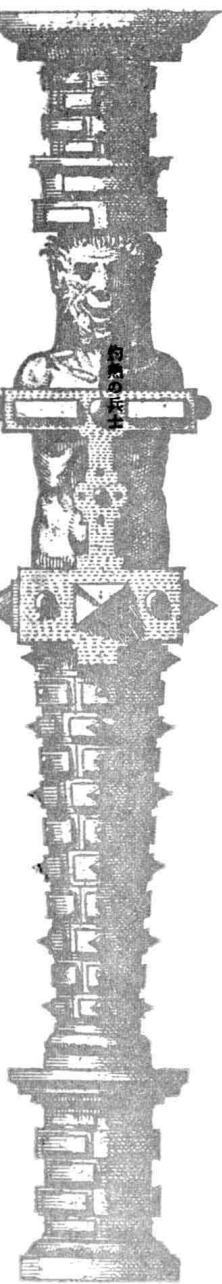
の敬虔な印度の懺悔僧ムクホパダヤのおこなう奇蹟の療法のことは、わずかにヒソヒソと声をひそめて語るにとどまっていたのである。

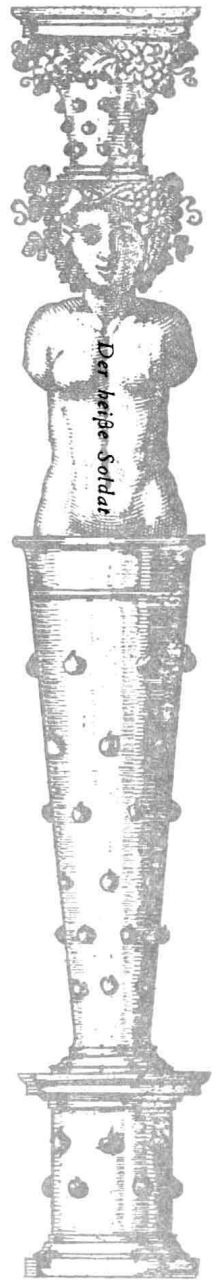
小戦闘こぞうめいがすんで長い時がたつてから、最後の負傷兵とて、ボヘミヤ出身兵ヴェンツェル・ツァヴァデルが、二人の安南婦人によって野戦病院に担ぎ込まれてきた。こんなに遅くなって今ごろ何処から来たのか、と尋ねられると、女たちは、ツァヴァデルがムクホパダヤの庵いおりの前に死んだように倒れているのを発見し、それから——この行者の無人の庵のなかに、ただ一つ見つかった——オパール色に輝く液体を彼の口に注ぎこんで、なんとか生命を甦よみがえらせようとしたのだと語った。

医官は、どこといて傷を見つけ出すことができず、問いただしてもこの患者から返ってくるのは、スラヴ方言の響きとわかる獣けだものじみた唸り声だけだった。医官は、どんな症状にも合うように浣腸剤を処方して、将校テントへ戻っていった。

軍医や将校のご連中は、ご気嫌うるわしく雑談に花を咲かせていた。短いとはいえ血みどろの局地戦が、生死のことなど古い日常茶飯事のなかへ埋めてしまっていたのである。

＊1—葡萄のしぼり汁のいっぱい詰まった頭の意。





ちようど、モストシェーデルが、シャルコー教授・1について——並みいるフランスの同僚たちにあまり痛烈にドイツの優越を感じさせないように——ほんの少しばかり肯定的な言葉を述べ終えたところへ、印度人の赤十字看護婦がテントの入口に姿を現わし、片言のフランス語で伝えた。

「ヘンリー・サーボレット軍曹死亡、喇叭手ヴェンツェル・ツァヴァデル体温四十一度二分」

「悪がしい民さ、スラヴって奴は」 担当医官はつぶやいた。「奴っこさんときたら、熱があっても傷はないんだぜ！」

看護婦は、むろんまだ生きているその兵士の咽喉に三グラムのキニーネを詰め込むよう指示をうけて、その場を去っていった。

モストシェーデル教授は、医官の指示の最後の言葉をとらえて、この時とばかり、長たらしい学識あふれる弁舌をふるい始めた。

犬も歩けば棒の喩え^{たと}よろしく、自然のなかで偶然にこの治療薬に突きあたっていた素人どもの手中から、良薬キニーネを発見する術^{すべ}を心得ていた学問の勝利に栄光あれ、という次第である。

教授の話が、このテーマから痙攣^{けいれん}性脊椎麻痺症に移り、聞き手たちの目が、もうガラスのようにトロンとし始めたとき、またもや看護婦が報告をもって現われた。

「喇叭手ヴェンツェル・ツァヴァデル、体温四十九度、もっと長い体温計をお願いします」

「その熱ではとうの昔に死んでおるはずじゃが」 教授は苦笑しながら言った。